

拙著『宗教事件の内側』（岩波書店）における元オウム真理教幹部・
広瀬健一に関する記述の一部事実誤認について

2009年 11月

藤田庄市

1. 拙著『宗教事件の内側』において、筆者（藤田）は元オウム真理教幹部・広瀬健一（2009年11月、地下鉄サリン事件などで最高裁にて死刑確定。以下、広瀬）について言及したが、296ページ13行目～14行目の記述に一部に事実誤認があった。
2. その記述は以下の通りである。

「そこに書かれている通りの修行法をやってみると神秘体験が起こった」とあるが、「そこ」とは麻原彰晃の『超能力秘密の開発法』、『生死を超える』、『イニシエーション』、『マハーヤーナスートラ』、『月刊マハーヤーナ』などの著作のことだが、これは事実誤認であった。
3. 広瀬の手記「学生の皆様へ」（以下、「手記」。「川島堅二の宗教学研究室 <http://www1.ttv.ne.jp/~kawashima/>」および「S-tation～摂理途中下車のススメ <http://tochugesha.web.infoseek.co.jp/>」に掲載）によると14ページに

「ところが、、、修行もしていない、、、」

とある。つまり本を読んだだけで体験が起きたのである。そして、一ヵ月後には「手記」14ページ～15ページにあるような強烈な神秘体験を広瀬被告は経験する。
4. 以上の広瀬の記述については、彼のその後の行動および筆者のこれまでの宗教取材の蓄積から真実を認めざるを得ない。よって、筆者の記述は事実誤認である。繰り返すと、修行法を行なかったにもかかわらず、本をよんだだけで体験はおきたのである。つまり、被告の体験は後述の「突然の宗教的回心」だった。
5. 以上の認識に立つと、拙著の「入信・出家の道を一気に走った」という部分および297ページの「オウム信徒の入信時にあったであろう『浅薄さ』や『単純さ』」の部分について再検討する必要がある。「手記」をもとに再検討する。
6. 広瀬は新宗教に対してはエホバの証人の輸血拒否事件や、統一教会の霊感商法などを報道によって知り、新宗教に対して不信感をもっていた。1988年2月ごろ、広瀬は偶然に麻原彰晃の著作を見かける。そして読むと、一週間後くらいから、著作に書かれていた体験が広瀬の身体に現れた。にもかかわらず、広瀬はオウムに近づけな

った。なぜなら、既述の通り新宗教に拒絶反応があったからである。（「手記」13ページ～14ページ）

7. しかし、麻原の著作を読み始めた約一ヵ月後、「手記」14ページ～18ページにあるような強烈な神秘体験を広瀬は経験する。ここに広瀬は「突然の宗教的回心」によりオウム真理教に入信する。広瀬にとってオウムの世界観はまさに現実として感じられ、クンダリーナの覚醒は、指導者がいないことの危険性を実感させるものであった。（関係者の法廷供述によると、被告は平成2年ごろ「教団の本をよんだだけでクンダリーナが覚醒し、困って教団に相談に行った」旨話していた）。つまりは「突然の宗教体験により、思考体系が急激に変容した（突然の宗教的回心）」のである。
8. 入信後の広瀬にとって、オウムの教義のリアリティは諸体験によって深められてゆき、麻原は「神」といえる存在として確実に深く根付いてゆく。（「手記」21ページ～22ページ）
9. とはいえ、入信しても広瀬は出家することはまったく考えていなかった。広瀬が読んでいた麻原の著作によると出家までする必要はなかった。また、長男であり、両親や家に責任を感じていたからである。就職活動も熱心に行い、1988年10月に大企業の研究職に内定したときはとても喜び、そして安心した。母親はその時の様子を法廷で証言している。
10. しかし、広瀬の入信後、麻原は、現代人は悪業を積み来世は地獄界や餓鬼界、動物界といった苦界に転生する、世紀末には核戦争が起こると盛んに説き、その救済のために出家者を増やしていた。広瀬被告は就職内定後、街を歩いたり、人と接すると「苦界に転生するカルマ」を感じるようになる。これは苦しく、体調が悪くなったり、気味悪いヴィジョンもみるようになった。また、広告などを見ると、頭痛がすることもあった。そのように広瀬が1988年初冬ごろ話していたことを、広瀬の友人は法廷で証言している。一方、麻原のエネルギーにより自分のカルマが浄化されるのを感じた。広瀬は麻原の説くように「一般社会で通用する価値観は苦界に至らせると思うようになり、解脱、悟りを目指すことにしか意味を見出せなくなりました」（手記）。こうして1988年末、麻原から強く迫られたこともあり、翌春、広瀬は大学院卒業と同時に出家した。入信後、出家に至る経緯は「手記」26ページ～29ページを参照されたい。
11. 拙著において広瀬が「入信・出家の道を一気に走った」とした。しかし、みてきたように、入信時における新宗教への警戒感すらも一挙に砕いた強烈な神秘体験、入信

後における出家願望を抱くまでのプロセスを検討すると、「一気に走った」ということにより、広瀬の内面の複雑な変容過程をみえなくしてしまったと考える。また、入信時の「軽薄さ」「単純さ」については、カギカッコをつけたことにより、そんな簡単なものではないという意を込めたとはいえ、具体的な事実の記述をしていないことで、そのようには言えないであろう。

12. 拙著296ページ11行目に「入信動機をも撃った」、また16行目～17行目に「この広瀬の軌跡を念頭におくかのように」とあるが、「手記」によれば誤認となるので、この部分を取り消す。
13. なお、拙著188ページ5～6行目に広瀬が TM の会員だったことから、広瀬が新新宗教との関わりがあったとしたが、広瀬自身の認識では、「TM は自身を非宗教と公言しており、教義も示されず、宗教的实践もなかったことから、TM を宗教と認識していなかった」ということである。

以上